成蹊大学日本文学科　日本探求特別講義B

2012年後期　**江戸の本づくり**

第９回　メディアとしての写本

橋口（はしぐち）　侯之介（こうのすけ）

写本も数多くつくられた

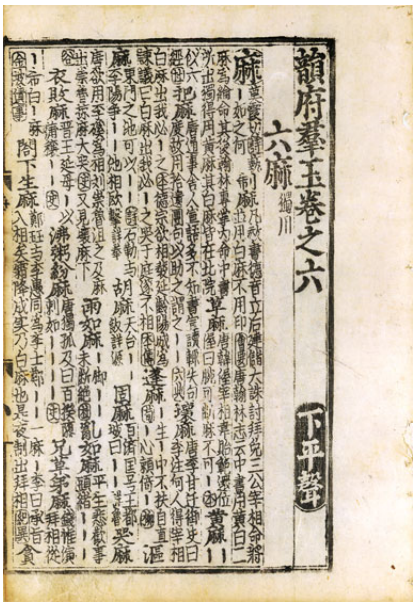
これまでは、「印刷された書物」である版本（はんぽん）に重きを置いて述べた。しかし、じつはそれでは和本の半分しか語っていないことになる。日本では「書かれた本」である写本の比重は高く、旺盛な出版文化の花が開いた江戸時代後期になっても、まだ写本が数多くつくられていた。日本の書物を語るときには、どうしても写本の重要性を忘れることはできない。

江戸時代までの写本は、版本と同列に書物として扱われてきた。装訂も同じように仕立てられた。書いたものを、簡単に綴じておくという程度ではすまさず、版本と同じようにきちんと周囲を断裁して袋綴じにし、さらに表紙をつけたのである。版本と違うのは、その表紙に手書きの題簽を貼るくらいで、一見しただけでは、版本なのか写本なのか区別ができないほどである。それは、写本も版本も同じように伝存することを念願したからだ。実際、写本もそのまま残され、蔵書には版本も写本も混然と置かれたし、本屋の古本部門でも写本は重要な品揃えのひとつだった。
現存する和本をサンプル調査したところ、約 40%が写本だった。

これまでは、本屋を中心に版本がどうつくられ、どう売られてきたかを見てきたが、書物がどう読まれてきたか、どう利用されてきたかを見ていこうとすると、**版本･写本の区別には意味がなく、それらを総合した書物＝和本全体を対象として考えなくてはならない。**そのために、写本とは何なのかということを知っておく必要がある。そして、写本がどう「つくられたか」という問いは、どう「読まれたか」と同じであることも理解するだろう。

中世の書物事情

平安時代から経典や仏教研究書の類は印刷されていた。しかし、まだ出版活動をする商人はいなかったので、寺院で作成してごく一部の僧侶向けに読まれただけである。お経は寺院に奉納された。
その中で、南北朝時代くらいから禅宗である臨済宗の大きな寺院で印刷された本は五山版（ござんばん）といわれて、中国風（宋元版）の木版印刷でつくられた。その中で禅の専門書は内典（ないてん）と呼ばれて本流ではあったが、外典（げてん）と呼ばれる仏教以外の漢籍や歴史、漢詩の本が出て、ようやく仏教以外のジャンルの本が印刷されるようになった。



→五山版の外典のひとつ『韻府群玉』（中国の百科辞書）

しかし、中世を通じて、大半は写本で本は伝わった。
ヨーロッパでも中世は教会（修道院）が書物を保管し写本をつくり、頒布していた。この書物の頒布のことを publishing 売る者を publisher　と呼んでいた。このことばの語源である。

『源氏物語』の伝わりかた

本を伝存することに意義を感じていた日本中世以来の読者は原本を大事にするが、同時に副本をつくっておいて万一に備えた。寺社の僧侶・神官にとって書物を写すことは信仰でもあり、大事な「読書活動」でもあった。そのさいに注釈をしながら進めていくが、このことは次週に詳しく述べる。
『源氏物語』が今日読むことのできるのは、この中世 500 年の間の写本活動のおかげである。紫式部が書

いたであろう原本は、鎌倉時代にはなくなっていた。そのほかの平安時代の文学書の大半は歌集などを除くと原本は紛失していた。しかし、誰かが副本をつくっておいてくれたおかげで本文は残った。ただし、写すという手作業には必ずミスがつきまとう。まして物語は、勝手に改作してしまうこともよくあった。
そのため、良い写しも悪い写しも残されて、どれが原作に近いのかわからなくなる。
鎌倉時代の藤原定家は、それを校訂した。いくつもの写本を比べて最良の本を選び、さらにその間違いを正して比較的正確な写本を完成させた。これを表紙の色にちなんで「青表紙本」という。別に源良行らも同じような作業を行い、現在「河内本」として残されている。両者の間には、微妙な違いがある。定家は『伊勢物語』も何度も書写した。

↑定家の奥書（戸部尚書）がある江戸時代の『伊勢物語』

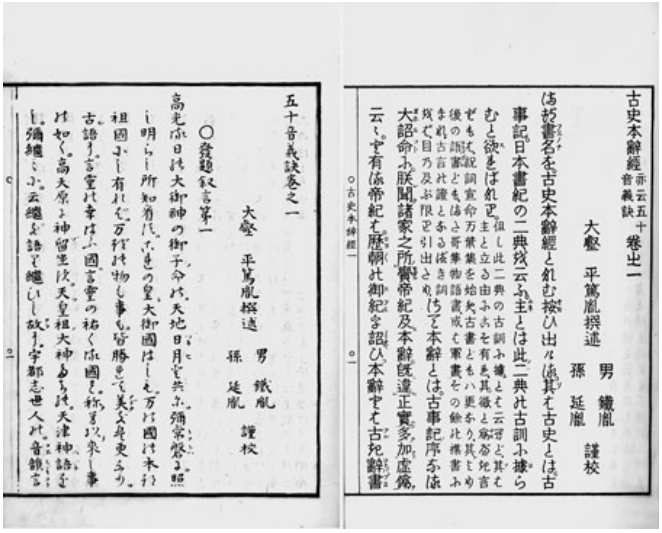
その青表紙本は定家自筆本が残っていないので、室町時代の写しが残っていて、それを今日の古典全集などの定本にしている。この写し続けてきたおかげで、今日『源氏物語』が全巻読めるのである。1000 年前の文学が今も完全に読めるのは奇跡である。

バラエティーに富んだ写本

江戸時代になって印刷本による出版が盛んになっても写本の需要は無くならなかった。版本にはできないつくり（例えば↑絵巻物や軸物、極彩色の絵、図鑑）も必要だし、商業出版には向かない内容、秘儀（免許皆伝）、豪華本など多種多様な写本がつくられて、今日に伝わっている。

江戸時代は写本も商品だった

江戸時代の儒学者・伊藤仁斎と、その子・東涯の家塾を古義堂というが、そこには延べ数千人の弟子がいた。その弟子に著作を売るさい、市販の版本のほかに「秘書」と称して写本も売った。同じ事は、江戸後期の平田篤胤の塾である気吹舎でも写本が高値で売られていた。右の図は、篤胤著作の『古史本辞経』（写本は『五十音義記』）同じ内容の本版本と写本。写本のほうは、そのまま見ただけでは手書きだということがわからないほど丁寧にかかれている。



写本の影響力

江戸時代、赤穂浪士の討ち入りは出版も上演も禁止されていた。本屋仲間がつくった自主規制の目録「絶版書目」には赤穂浪士ものは時代、場所、人名などを変作した場合でも、すべて「板行差留」とし、すでに本屋に流出したものもすべて「絶板」するとしている。江戸時代の絶板とは発禁処分である。板木ごとすべて廃棄せよということである。それでも赤穂浪士の討ち入りの話は誰でも知っていた。有名な『仮名手本忠臣蔵』は、討ち入りから五十年近くたった寛

延元年（1748）に人形浄瑠璃として大坂竹本座で上演されたのが初演である。まもなく江戸歌舞伎でも演じられるようになり人気作品となった。ただし話は室町時代の設定で、浅野内匠頭は塩谷判官、吉良上野介は高師直、大石蔵之助が大星由良助などとなっている。とはいえ観衆は元禄時代に赤穂藩の浪士が主君の仇を討った話であることをよくわかって観ていた。しかも浪士への心情的な応援が大きかった。それは赤穂浪士ものの写本がたくさん作られていたからである。**印刷物と違って大量配布ではないが、それでも人から人へ伝えられたのだ。**

写本だと町奉行も大目にみていた。

こうした写本は、貸本で流通した。影響力が大きいのはそのためである。大きな貸本屋（江戸時代の中期から名古屋にあった大惣と呼ばれた貸本屋はその大手で、そのままそこの本が京都大学に保存されている）の本が現在でも残されているが、そこには絶板処分を受けたような本でも写本にして持っていた。したたかである。

→寛政の改革で絶板となった蔦屋重三郎が出した洒落本『仕懸文庫』は、発禁とはいえ、現在でもよく残されている。大惣はそのような発禁本も写本にして貸していた。貸本屋は同じ本を10人以上、数十レベルの人に貸すから、それだけでも印刷本の数十部の発行並みの影響力を持った。

なぜ江戸時代にも写本が多いのか、という疑問は、以上から写本の持っている特質を理解すれば納得できる。ひとつには、一度書いたものは大事に保管するという中世以来の伝統的な考えかたが江戸時代も残っていたこと。それをさらに積極的に商品的価値を認めるところまで発展したことがあげられる。

印刷物への幕府側のプレッシャーにたいして、私家版などとともに写本が対応できたことも大きい。本を出したいという欲求は強く、町人、農民にまで広がったが、私家版で印刷したのでは製作費用がかかりすぎる。その負担が重過ぎる者には、写本は安くすむ本づくりだった。その広範な層が存在したことが、背景にあった。また、読者側もほんとうに読みたいものが印刷物にならなかった場合には、写本を求めて読んだ。それで十分に普及したのだ。

当時の人は、筆でものを書く労をいとわなかった。そして、それを書き放しにするのでなく、本に仕立てて、保存しやすいようにした。写本は今でいうノートのようにあらかじめ製本されたものがあって、それに書き込んでいくこともあったが、多くは一枚ずつ書いていき、後で綴じた。製本するのは面倒なものである。ただ綴じればよいというものでない。きれいに揃えて、周囲を断裁し、それから表紙をつけて糸綴じをする。このように、きちんとつくったということは、写本が一過性のノート的発想で存在していたのでなく、版本と同じように複数の人に読まれ、何世代にもわたって伝えられていくことを前提にしているということなのだ。次の読者に供したからこそ、今日まで残ったのであろう。

江戸時代を「出版の時代」とはいえない

中世までを写本の時代、江戸時代を版本の時代と割り切るのはちょっと待ってもらいたい。

ヨーロッパでは、たしかに 16 世紀以降、活版印刷の浸透とともに写本は一気になくなり、印刷物に入れ替わってしまう。中国でも宋代を境に印刷が盛んになると写本は激減していく。とくに明代の末期に印刷本がかなり盛んになったとき、事実上写本（中国では抄本という）は流布しなくなる。印刷される本が「良い本」で、印刷されないようなものはレベルの低い本だと考えるのだ。

ところが、日本では印刷本が盛んになった江戸時代になっても写本がこうして残った。その用途、役割などによって使い分けて、写本に意義を持たせてきた。そこが諸外国と異なところである。写本も版本も双方とも存在価値を持ったのだ。そこに本とは何かという問いへの重要な答えを包含していると思う。

講義の要旨は pdf にするので、http://www.book-seishindo.jp/seikei_tang/でダウンロードを。

質問は、専用メールでいつでも。　khashi@s.email.ne.jp